



# 収録台本

2021年11月前半号



TIME	内容
	オープニングタイトル
	<p>田村： お元気ですか！市民のみなさん。麒麟の田村裕です。</p> <p>廣川： 廣川陽子です。 田村さん！この写真、覚えてますか？ 場所分かりますか？</p> <p>田村： 場所？ え～っと、淀川？</p> <p>廣川： こちらは、以前特集で紹介した「スイカレ」って覚えてますかね？</p> <p>田村： スイカレ？ 何だったっけ？</p> <p>廣川： 市内で撮影されて、Instagramに投稿された写真で卓上カレンダーを作ろうという企画ありましたよね？</p> <p>田村： あったね。はいはい。</p> <p>廣川： その特集で実際にリポーターの梅山さんが撮った写真です。</p> <p>田村： そうか、そうか！</p> <p>廣川： 今回、カレンダーに採用される写真13枚が決定したということなんです。</p> <p>田村： おお！ ということは！？</p> <p>廣川： 残念ながら、こちらは採用されなかったんですが…</p>

田村：

なんや、それ！採用されたんかと思ったわ、その出し方。

廣川：

ごめんなさいね、梅山さん。出しておいて。  
どんな写真が採用されたのか、気になりませんか？

田村：

もちろん気になります。

廣川：

ということで、スイカレ2022の写真を一部ご紹介しましょう。  
すごい！

田村：

これは絵力あるわ～。

廣川：

これは JR 岸辺駅の自由通路から撮った写真ということで、  
たくさん並んだ線路と夕日の構図が素晴らしいですね。

田村：

完璧じゃない、これ。

廣川：

他にもこんな今のご時勢を表した写真も採用されているんですが、こちらです。

田村：

今ならではやね。

廣川：

狛犬がマスクしていたり、足元にはディスタンスを取るための目印が  
付いていますよね。  
他にも、これからの季節、吹田の街はこうなるのかなっていう写真がこちら。

田村：

おお、いいね～。

廣川：

これらを含めた13枚がスイカレに採用されていて、前を上回る800点以上の応募があったんですって。  
市のホームページでは採用された13枚と入賞された16枚を公開しているということです。

田村：

もう見れるんですか？

廣川：

はい。見ることができます。

田村：

それはじゃあ見に行きましょう。

廣川：

そして、この「スイカレ2022」ですけど、11月15日から販売開始ということです。500円でゲットすることができます。  
販売場所は市役所シティプロモーション推進室窓口です。  
売り切れ次第終了ということですので、どうぞお早めに。  
さあ、このまま特集に行きましょうか。  
今回は「100年続く吹田の老舗」と題してご紹介します。

## 特集「100年続く吹田の老舗」

### ナレーション

数ある企業やお店の中で1世紀に渡って営業を続ける「100年続く吹田の老舗」。

### タイトル「100年続く吹田の老舗」

### ナレーション

1軒目はこちら。吹田市江坂町にある「天牛書店」。  
新御堂筋から1本筋を入った住宅街の中に立つモダンな建物の中へ入ると、  
整然と並べられた、本の数々。  
一見新刊本のように見えますが、こちらは全て古本。  
店内には最近発行された雑誌や単行本から貴重な古書、アートまで様々なジャンル  
が揃っています。  
そう、天牛書店は明治40年創業。今年で114年を迎える吹田の老舗です。  
創業のきっかけを3代目の天牛高志さんに伺いました。

### 天牛さん

聞いた話によるとうちの祖父・新一郎のお父さんが骨董屋をやっていたんですけど、  
商売に失敗して和歌山からこっちへ来たみたいなんですけどね。その当時に少しの  
本を持って夜店を始めたみたいなんです。それからしばらくして小さな店を  
手に入れてそこで15年ぐらい試行錯誤しながら1932年ぐらいでしたかね、  
大きな店に変わるんですけども。

### ナレーション

創業者の天牛真一郎は、客との駆け引きで行う古本の売買方法を止め正札販売を  
行いました。当時としては画期的なことでお店の評判も上がり繁盛したといえます。  
この経営手腕で戦前は「日本一大きい古本屋」として名を馳せました。  
しかし、そんな天牛書店に大阪大空襲の災難が襲いました。

### 天牛さん：

もう全部焼けたんですよ。その当時7件ぐらい支店もあったんですが、一切全部  
焼けてしまってすっからかんになって。

### ナレーション

一度は全てを失った天牛書店でしたが「本が恋しい」という新一郎氏の思いで  
再興され、お店は再び賑わいを見せるようになりました。  
そして現在、お店を引き継いでいるのが、天牛美矢子さん。  
創業者、新一郎さんの曾孫に当たります。

美矢子さん

ずっと自分の育ってきた環境ですし、小さい頃から店のことは好きでしたので自分が手伝うことで貢献できるんだったら嬉しいなと思って働こうと思いました。

ナレーション

そう話す美矢子さんは、古書の中でも、美術書やアートの分野に力を入れています。ここでおすすめの商品を紹介してもらいました。

美矢子さん：

こちらは1885年から87年の間に出ていた「ル・シャ・ノワール」という雑誌でして、スタンガンと言ってとても有名な黒猫のイラストレーターの方がいるんですけど、その人のイラストなんかたくさん載っているんですけど、タバコの煙を追って遊んでいる猫ちゃんの絵が可愛いので見てたら楽しいかなという一冊です。

ナレーション

さらに、こんな浮世絵も古本屋さんの取り扱い商品なんだそうです。

美矢子さん：

こちらは魚軍と野菜軍が入り乱れてバトルをしているという浮世絵でして、名前がですね、「藤顔治郎直高（とうがんじろうなおたか）」とか「みかん大夫」であったり、そういう細かいところまで楽しめる、愉快な一枚になってます。

ナレーション

一般的には敬遠されがちな洋書や和本ですが、読むだけではなくアートとしても楽しめたり、発行当時の文化や風俗を感じることができるのも古書の魅力ですね。

天牛書店には本やアートを求めさまざまなジャンルの人々が訪れます。

しかし、時代の変化で本離れが進み、今までのような販売方法では生き残るのが難しくなりました。そこで天牛書店では新しい取り組みを行なっています。

美矢子さん：

実は「天牛書店イメージズ」という名前で画像を販売するサイトを始めまして、画像をダウンロードして購入していただくサイトなんですけれども、使っている画像というのが当店で写真撮影したアンティークの図版や本の画像を使っています。

ナレーション

お店が持つ膨大なライブラリーからデータを販売する新しい取り組み。

時代の変化に柔軟に対応することで老舗の名を守り続けています。

伝統を守りつつも、前進を続ける天牛書店。最後にこんなことを聞いてみました。

天牛さん：

本当あつという間という感じで、考えられないくらい早かったなという気はしています。基本的には、店ではスタッフ一同、お客さんには基本として一番大事なのは「親切にすること」やということはいつでも言っています。それぐらいですかね。

美矢子さん：

常に工夫をすることがシンプルに大事なのかなと思いますけど、あとは誠実な商売を続けるということが一番大事かなと思っていますので、常に顧みながら良いお店であるということを誠心誠意目指すことが結局繋がっていくことかなと思っています。

ナレーション

2軒目はこちら。吹田市山田東にお店を構える「松竹堂」。

閑静な住宅街にも関わらず、お店には途切れることなく商品を買求めるお客さんたち。みんなこぞって買求めるのはこちら。

そう、松竹堂は「フルーツ餅」が看板商品の人気の和菓子店。

ふわふわのお餅の中には、白餡とフレッシュな果物がゴロッと入っているシューシーなお餅です。人気はクチコミから広がって今や全国区。

そう、こちらの松竹堂も創業132年を迎える吹田の老舗です。

松本さん：

明治22年創業いたしまして、その時は落雁とか砂糖菓子を中心に製造してまして、先代の4代目の時からフルーツ餅というものを販売させていただきまして現在に至る形ですね。

ナレーション

そう答えてくれたのは、店主の松本勝成さん。松竹堂の5代目です。

明治22年に創業した松竹堂は、お菓子や缶詰などの食料品販売を生業としていました。

3代目の巖さんがお店に和菓子コーナーを設けたことがきっかけで、現在の松竹堂の原型が生まれました。

そして4代目の父：勝隆さんが作り出した看板商品「フルーツ餅」で松竹堂が世に知れ渡ることになったのです。

実はフルーツ餅誕生には勝成さんが深く関わっているのだとか。

松本さん：

僕が小さい時に洋菓子がとても大好きだったので、何とかして和菓子の方に持ってこれないかということで、それで僕が苺が大好きだったので、苺大福を作って何とかして和菓子に興味を持たそうと思ってフルーツ餅を作りました。

ナレーション

そう。フルーツ餅は先代が息子に和菓子に興味を持ってもらいたい一心で作られた商品だったんです。

勝成さんが成人しお店の経営に加わるとフルーツ餅の商品開発は父・勝隆さんと勝成さんとの二人三脚となりました。勝成さんのために作ったフルーツ餅が、今では二人を結ぶ強い絆となっています。

現在販売されているフルーツ餅は、20種類以上。

特に旬のフルーツを使った季節限定商品が人気なんだそうです。

松本さん：

一応定番メニューもあるんですけど、やっぱり和菓子屋さんということで四季の巡りを表現するお仕事だと思ってますので、そこは注意してお客様に四季を感じてもらえるようなものを提供するというところで営業してますので、そこらへんは気をつけてやっています。

ナレーション

こうして人気和菓子店となった松竹堂さんですが、5代にわたってここ吹田でお店を続けているのには、地域に対する愛着が溢れているからなんです。

それを垣間見れるのがこちらの商品。

松本さん：

たけのこ型の最中なんですけど、あちらは僕の祖父の3代目の方が開発しまして、ちょうど大阪万博があった時期なんですね。それで大阪万博のあたりは竹林が鬱蒼と茂っているところですね、どんどん開発で切り倒されていって、竹藪がだんだんなくなっていくのがすごく寂しかったみたいで、それを思っでああいうたけのこ型の最中を作って「昔は竹林があったんだよ」ということを後世に残そうと思って作った和菓子です。

ナレーション

代々にわたってこの地で商いを行っていた松竹堂ならではの商品ですね。

最後にこんなことを聞いてみました

松本さん：

100年という単位でいうと、すごい長い期間で長く続けるのは急成長しだすととても100年も続いていかないと思いますし、ここにずっとやらせてもらってスローなペースで商品開発もさせていただいてのびのびとやっていますので、そういったところが100年以上続くというのと、やはり近隣の住民の方のご支援だったりご理解があって100年以上続いているんだと思います。



TIME	内容
	<p>田村： すごいですね。100年続くとって。</p> <p>廣川： すごいことですよ。</p> <p>田村： 天牛書店さんもいろいろなことを乗り越えて今がありますから、やっぱり強いですね。今、本が売れない時代でちゃんと生き残る術を見つけてくれて、進んでくれているのが嬉しいですよね。</p> <p>廣川： 基本的なことを大事にしてる会社が続くのかもかもしれませんね。</p> <p>田村： 本当にそうですよね。そして松竹堂さん。</p> <p>廣川： 松竹堂さんなんですが、田村さんも大好きということなんですが、今回スタジオにご用意しました！</p> <p>田村： すいません、なんか。</p> <p>廣川： 田村さんの方は？</p> <p>田村： 柿。</p> <p>廣川： 季節ですね。</p> <p>田村： 秋ですからね。可愛いですよ。</p> <p>廣川： 葉っぱが乗ってて可愛い。見るだけでワクワクしてきますよね。</p>

田村：

ほんまにすごい考えたよね。いただきます。う～ん、これやん。  
柿なんて超季節限定やから、この時期じゃないと食べられへんし。

廣川：

私はメロン。メロンです。この上の艶々がメロンを表していて。  
じゃあ、私もいただきます。うん！美味しい！  
メロンの良い香りがフワツとして。  
白餡とフルーツがこんなに合うって知らなかったですもん。

田村：

「無理をせずスローに」って言ってましたけど、スローというよりは  
自分のペースという言葉がぴったりだと思うんですけど、  
そういう進化をしっかりとってるから、やっぱり強いですよ。  
歴史があって、しっかり変わる。

廣川：

地元の方に愛されてるのも伝わってきました。以上、特集でした。  
今回ご紹介した2店舗以外にも、吹田の老舗はあるというので、  
またシリーズ化出来たらと思っています。

田村：

吉本も100年超えてますから。

廣川：

あ、ほんまや！

田村：

ぜひシリーズ化しましょう。

ワンポイント手話 1 '00

TIME	映像	内容
	<p>トリキリ①</p>	<p>吹田市からのお知らせ（コロナ関連情報）  <u>＜廣川 ナレーション＞</u></p> <p>引き続き感染防止対策をお願いします。                      マスクの着用、こまめな手洗い、密閉空間では換気を徹底してください。                      感染対策が徹底されていない飲食店等の利用を控えてください。                      4人以下でのマスク会食を徹底してください。                      ワクチン接種の有無に関わらず、感染対策をお願いします。</p>
	<p>トリキリ②</p>	<p>「ワクチンの接種状況について」                      10月20日現在、全対象者の2回目接種者数は、市で定める接種実施計画通りに進んでいます。                      11月以降は接種体制を順次縮小する予定です。                      今後、接種対象年齢である12歳になる人や、事情により接種できなかった人などに対しては、希望する場合、接種の機会を確保する予定です。                      詳しくは市ホームページをご確認ください。</p>
	<p>トリキリ③</p>	<p>「追加接種（3回目接種）について」                      国からは、「ワクチンの2回目接種を終了した人のうち、おおむね8か月以上経過した人を対象に、3回目の接種を行う」という方向性が示されています。                      市としても、国の動向を踏まえ、速やかに接種を進めることができるよう準備を進めています。                      予約方法など詳しい内容が決まり次第、市のホームページやSNS、この番組などでお知らせします。</p>
	<p>トリキリ④</p>	<p>市コールセンターでは、ワクチン接種に関するご相談も受け付けています。                      電話番号は、フリーダイヤル 0120-210-750                      受付時間は午前9時～午後8時まで、土曜・日曜・祝日も対応しています。</p>

TIME	内容
<b>吹田の自由研究「基板がアートに！町工場の挑戦」</b>	
	<p>田村： 続いては、吹田の自由研究～！</p> <p>(拍手 フライングタイトル)</p> <p>廣川： このコーナーは田村さんが毎回あるテーマに沿って、あらゆる目線から「吹田」の街を自由研究していこう！というコーナーです。</p> <p>田村： 今回も私が吹田にまつわる様々な事柄を私なりに発表させていただきます。今回のテーマはこちらでございます。「基板がアートに！町工場の挑戦」。</p> <p>廣川： 基板？</p> <p>田村： ということで、気になるワードがたくさんですけど、どうということなのか見ていきましょう。こちら！今回お邪魔したのは豊津町にございます「株式会社 電子技販」さんです。普通の住宅街の中にポツンと突然大きめの工場が現れるんですけど、この町工場で作られているのは、こちら。</p> <p>廣川： 「基板」って、こういう基板かぁ～。</p> <p>田村： 駅の電子案内板などの中に組み込まれている基板なんですけど、これが無いと電子機器は作動しないということなんですけど、オーダーメイドで基板を作成しております。 「大阪ものづくり優良企業 2009」の優良企業賞を受賞しております。</p> <p>廣川： そういう賞も受賞されて。</p> <p>田村： すごい会社ですけど、皆さんもどこかでお世話になっている電子機器の 見えない所を作っている「縁の下の力持ち」と言っても過言ではないと思います。 今回お話をお伺いしたのは、こちらの会社の2代目社長の北山さんです。</p>

北山さんは工場の2階が実家だったので、小さい頃から基板に触れていた「基板マニア」。すごいですよ、基板愛が。  
今回僕がお話を聞いていても、ただのプレゼンじゃなくて、自分の好きなものの話を聞きに来てくれた人達やから、キラキラしながら「この基板はね～」とか言うて基板愛の強い、いつまででも話を聞いていたいような魅力的な方でしたけど、基板に対してただならぬ愛情をお持ちなので、北山さんにしか辿り着けない境地に辿り着いているんです。こちらでございます。「基板は完璧に計算された芸術」とすると北山さんはおっしゃるんですね。もはや芸術の域に達しているということなんですけど、じゃあ何が芸術やねん？ということなんですけど、基板に付いた部品にもコストがかかるので、最低限の部品でもれなく電子機器を制御する基板は設計時点で完璧に計算されている、と。  
ちょっと分かりにくいかもしれませんが、要は今回の商品はこのサイズやと。そしたらこのサイズの中でこの電子機器が行わなければいけないプログラムは何個あるねん？と。それを全部組み込んでいくのに、すごい計算されつくされているんですよ。このサイズで！

廣川：

田村さんもめっちゃくちゃ熱もってますよ。

田村：

やっぱり伝えたい！北山さんの基板愛を伝えたい！

廣川：

伝わってきました。そういうことなんだ～。

田村：

だから僕らはパッと見てこれの凄さは分かりませんが、基板を作ってる方からしたら「美しい！」「なるほど！ここにこれを置いて、これをこっちに持ってくるんや」みたいな、スーパーミニシムシティなんですよ。街づくりみたいなもんなんですよ。

廣川：

そういうことなんですね。

田村：

すごい整理整頓されているということなんですけど、そんな基板愛にあられる北山さんが、更にすごい物を作り上げました。こちらでございます。

廣川：

うわ！葛飾北斎。

田村：

そうです。みなさんもお存知の「富嶽三十六景 神奈川冲浪裏」ですけど、ちょっと色が違いますよね？ みなさんが知ってるものとね。

廣川：

黄金色というか…。

田村：

普通は青のイメージですけど、これがなんとプリント基板なんです。

廣川：

さっきの基板の小さいパーツがありますよね。あれで細かい波のしぶきとかが作られているってこと？

田村：

そうそう。これを組み合わせて、さっきのこれを作っているんですよ。

廣川：

ええ～！

田村：

すごくないですか！？

誰が思いつきますか？ 富嶽三十六景を基板で描こうなんて。

北山さんは幼少期から触れ合ってきた基板の美しさ、素晴らしさ、芸術性を突き詰めた結果、世の中の有名な芸術と組み合わせることに辿り着いたと。

廣川：

面白い。これは私も見たい。

田村：

これ生で見たらずっと見てられるよ。「こここんなふうになってるんや」とかなるんでね。これは飾る基板アートですよ。壁に飾ってますから。

これがなんと持ち運べるようになりました。それがこちらです。

廣川：

うわっ！

田村：

スマホケース、そして名刺入れ、マネークリップ、いろんな商品があるんですけど、後藤市長も使ってるんですよ。

廣川：

あっ、そうなんですね。

田村：

そうなんです。後藤市長も愛用されておりますので、見たことある方もいらっしゃるかもしれませんが。吹田市の職員の方は逆にこれを見たことなかったら もぐりということが確定いたします。

廣川：

大丈夫ですか？知ってますか？

田村：

デザインも様々なものが作られているということで、すべてに基板の製造技術を応用して作ってる。

廣川：

近くで見たい。こうやって見たい。

田村：

見だすと止まらへんなるよ。本当に。芸術性がすごいから「こんなふうに繋がっていくんや」とかなるので、本当に美しいんですけど、これで終わりではございません。更に進化します。さあ、基板がどうなるのか！？こちら！分かるでしょうか？

廣川：

何ですか？何ですか？

田村：

街にある看板とかで「いらっしゃいませ」とか流れるのあるじゃないですか。あれを持ち運べるサイズにしたんですよ。こちら、スマホケースですからね。

廣川：

本当に手の平サイズで、名札みたいに出来るってこと？

田村：

そうそう！だから今回僕が行ったら、胸ポケットにこれが入ってて「田村さん、ようこそ」って文字が流れて動いてるんですよ。僕はアイドルのコンサートグッズとかで…、

廣川：

めちゃくちゃ良いじゃないですか！

田村：

ペンライトはもちろん、自分で推しの名前を文字で流して振ってればかなり目立つこと間違いなしですよ。

廣川：

「〇〇ちゃん、大好きだよ」とかって、こう…。

田村：

そうそう。この使い方どうか分からないですけど、「吹田駅で起こして」とか。

電車の中であまりにも眠い時に、カバンに文字を流しておけば「コイツ吹田駅で起こしてあげなあかんわ」って。

廣川：

アイデアがなんか…、

田村：

だから僕も商品開発と一緒にさせてくれと、アイデア出しさせてくれと、こんなん考えたくてしょうがない。

廣川：

ワクワクしちゃう。

田村：

面白いんですよ。というわけで、今回は普段目に見えない物をアートとして前面に打ち出すという凄い方が吹田におられますのでご注目いただきたいなと思います。廣川さんいかがでしたか？

廣川：

めちゃくちゃ面白かった。

最初は「基板？基板って何？」ってところから始まりましたが、あの北斎の画も見たいし、スマホケースも欲しくなったし。

田村：

何かを一途に愛し続けるってすごい大事だなと思いました。

この基板アートの雑貨は電子技販のホームページで購入することができます。

気になる方は是非ホームページを見てみてください。

以上「吹田の自由研究」でした。ありがとうございました。



ということでエンディングです。あっという間でございます。

廣川：

楽しすぎて。早い！もっと聞きたかった、話。あとで聞かせてください。

田村：

もう、行きなはれ。すぐそこや。

廣川：

ほんまですね。行こうかな。

田村：

豊津やから。

天牛書店さんと一緒に行ったらええわ。駅挟んで両サイドにあるわ。

廣川：

ちょっと散歩して帰ろうかな。

田村

是非とも行ってください。

今回はここまでです。また次回お会いしましょう。さようなら～